

乳香のはなし

立命館大学文学部 准教授 馬場 多聞

中東の説話集『アラビアン・ナイト』には、「アリババと四十人の盗賊」という物語が収録されている。四十人の盗賊が世界中から盗んできた宝を隠している洞窟を発見したアリババは、金銀財宝が眠る広間を巡った後、以下のような景色を「鼻」にする。

そこからさらに薬品や、香料、芳香剤などの広間にはいって行きました。(中略) 丁香や麝香がふくいくとかおり、竜涎香や霊猫香の心をときめかえすえならぬ香りがただよい、バラ水とナッド(練香)の魅惑的な香りはあたりに立ちこめ、乳香とサフランとは高貴な芳香を立ちのぼらせ、白檀はあたかも、焚火の薪のように投げ出されており、そうして伽羅の木はまるで用のない雑木のように無造作に放り出されたままであります。(前嶋信次訳『アラビアン・ナイト別巻：アラジンとアリババ』平凡社、1985、203-204)

驚嘆したアリババは、伽羅や乳香の芳香をかぎまわったり絹織物の肌触りを確認したりした後、金貨が詰まった袋をロバに載せて持ち帰ってしまう。その後、欲深い兄カーシムの死や宝物を奪われたことに気付いた盗賊の襲撃に遭うも、美しく聡明なエチオピア系女奴隷マルジャーナの勇気と機転によってこれを撃退し、アリババとその家族は盗賊の宝をもとに幸せに暮らしたという。

この話で着目すべきは、丁香や麝香、竜涎香、霊猫香、バラ水、ナッド、乳香、サフラン、伽羅といった各種の香料が、盗賊の宝の絢爛さを示すために登場している点である。アラビアン・ナイトにはほかにも、シンドバードの冒険譚や官能的な逸話において、様々な香りが漂っている。たとえば、竜涎香が湧き出る泉の記述や遠く東方に産出する竜腦の採集法に関する話、そして「美女のからだは麝香の香り」といった表現など、枚挙に暇がない。中東や地中海周縁部において培われてきた香料への憧憬が、ここには描かれているのである。

このうち、中東で生産された香料である乳香について、詳しく見てみよう。ムクロジ目カンラン科ボスウェリア属の樹木から滲み出る樹脂である乳香は、アラビア語ではルバー

ン (lubān) と呼ばれる。L と B と N の音の組み合わせは白や乳を意味し、実際、乳香の色は白色から薄黄色を帯びたものとなっている。ゴム質であるため普段はほとんど匂わないものの、火をつけると融解し、香煙を発する。乳香のことを英語で frankincense と呼ぶが、これはフランス語の franc encens、すなわち「真の香り」という単語に由来する。つまり、中東や地中海周縁部で古来焚かれていた乳香こそが香りであるという考え方が、ここに垣間見えている。

乳香の生育地は、南アラビアや対岸のソマリア、ソコトラ島にほぼ限られる。アラビアン・ナイトの時代には、南アラビアのゾファール地方のシフルという港から積み出される乳香が特に知られていた。現在はオマーン国に属するこの地域は、2000年、「乳香の交易路 (The Frankincense Trail)」として UNESCO の世界遺産に登録された。2005年には、現在の名称である「乳香の土地 (The Land of Frankincense)」に改称されているが、乳香の交易に使われた四つの遺跡と乳香が生育する一帯が対象となっていることに変わりはない。この乳香の土地における乳香の採集や交易は、遅くとも紀元前三千年期にははじまっていた。イスラームが勃興する以前のイエメンに栄えた古代南アラビア諸王国は、乳香交易によって莫大な利益を得ていたと言われる。

南アラビアからもたらされた乳香は、中東や地中海周縁部において、主に焚香料として用いられてきた。香炉に火をつけた炭とともに置くと、乳香はたちまちのうちに香煙を発する。民家やイスラーム教徒のモスク、キリスト教徒の教会、ユダヤ教徒のシナゴークを



乳香 (筆者撮影)

訪れば、空気を清めたり香り付けしたりするために焚かれている様子を現在でも見ることが出来る。歴史史料のなかには、売買される女奴隷に乳香で香り付けをしたという記事や、夜の情事のために乳香と砂糖を混ぜ合わせたものを口臭消しとして用いたという記事が散見する。さらには、イスラームの精霊であるジンを呼び出したときには、両手に乳香の煙をまとわせた状態で聖典クルアーンの第72章であるジンの章を詠みあげるとよい、とも書かれている。

一方で、その薬効にも期待が寄せられていた。中東で発展したいわゆるイスラーム医学はギリシア医学の考え方を継承しているが、そこでは万物が熱、冷、乾、湿の四つの性質のいずれかを有し、また、第一等（食物）、第二等（食物であり薬）、第三等（食物ではなく薬）、第四等（毒）のいずれかに分類された。乳香については、第一等として用いられる時は乾の性質を、第二等あるいは第三等として用いられる時は熱の性質を有すると考えられていた。また、乳香には消化作用や粘着性、洗浄性、収斂性といった特性があるとされた。これらの性質や等級、特性をもとに、乳香がいずれの病気や気質に対して効果があるかという点が検討されていたのである。

13世紀に没したイブン・アルバイタールが著した薬学書には、乳香が有効とされる病気や怪我として、ひょうそや皮疹、火傷、凍傷、頭痛、ふけ、脱毛症、耳のなかの傷、目のなかの潰瘍、目の充血や淋病、乳房の炎症、心臓の動悸、食欲不振、胃痛、消化器官や臀部の潰瘍、下痢、赤痢、便秘などが挙げられている。乳香を水とともに飲用したり、粉に



イエメンの首都サナアの路上の乳香商（筆者撮影）

して傷口に塗ったり，その他の様々な物品とともに混ぜて用いたりすることで，様々な症状に対してよい効果があるとされた。14世紀に活躍したイブン・アルカイムは，イスラームの預言者ムハンマドによる「家で乳香とタイムを焚け」との言を引きつつ，乳香が物忘れや心臓の強化，知性の強化によい旨を説明している。

ほかにも乳香は，伝染病対策においても有効とみなされていた。11世紀のエジプトで活躍した医師イブン・リドワーンは，伝染病が蔓延する原因を空気の腐敗に求め，「タールの香りやマスチック，白檀，ストラックス，没薬，乳香，乳香の樹皮といった焚香料が，この状況において効果的である」と述べている。また，同時代に生きたネストリウス派のキリスト教徒である医師イブン・ブトラーンは，乳香を飲用すると天然痘や丹毒，紅斑に効果があると考えた。

もっとも，実際に乳香がどの程度の頻度でどのくらい使用されていたか，いかほどの効果をあげていたのかといった点については，詳らかではない。現在の成分分析によれば， α -ピネンや β -ピネン，リモネンといった抗菌作用や抗ウィルス作用，抗アレルギー作用を有するものが乳香に含まれていることが明らかとなっている。これを踏まえれば，上で見たような伝染病対策などに乳香を用いたことは理にかなっていたと言えるだろう。もっとも，西洋医学が浸透してきている現在では，乳香に薬効を期待する人は少ないように感じる。余談であるが，筆者は持病の片頭痛を緩和すべく乳香を何度か飲用してみたが，今のところ一切の効果を認識できていない。

2020年現在，乳香をはじめとした様々な香りがただよっていた中東の情勢は，刻々と変化している。本稿を書いている間にも，米国とイランとの間で軍事活動を伴った対立が新たに生じているし，シリアやイエメンにおける内戦が終わる兆しは依然として見えない。しかしこうした時だからこそ，これまで三千年間にわたって人々の暮らしと寄り添ってきた乳香は，人々の気持ちを静め，空気を清めるために，中東のここかしこで焚かれているように思われるのである。